

日本万国博覧会までの軌跡 -EXPO ' 70開催50周年の回顧-

雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	55
ページ	153-158
発行年	2021-01
URL	http://doi.org/10.34428/00012454



「日本万国博覧会までの軌跡」

——EXPO'70開催50周年の回顧——」

The History of the International Expositions in Japan :
Reconsiderations on 50th Anniversary of Expo'70

12月開催のシンポジウムを見据えて／回顧・問題提起編

2020年度東洋大学アジア文化研究所 研究課題「日本の博覧会におけるアジア表象の推移—日本万国博覧会50周年を契機として—」について、井上円了記念博物館で万国博覧会の過去を回顧する展示を行い、12月開催の国際シンポジウムに向けた問題提起を行いました。

その様子を【ご挨拶】【概説】【対談】の3タイトルに分けて動画を公開しました。

今回はそのうちの【対談】を掲載します。※最後のページにそれぞれの動画のURLがご紹介します。

■アジア文化研究所 対談 野間信幸×後藤武秀



左から、野間信幸所長、後藤武秀前所長

（野間）日本の博覧会におけるアジア表象の推移というテーマでこの展示が企画されています。その副題の「日本国際万国博覧会50周年を契機として」を巡りまして、前所長の後藤先生と野間とで対談していきます。私たちはほぼ同じ世代ですので、万博当時の生き証人とでもいう年齢に達してしまいました。そこでまず、その当時の思い出を話していきましょうか。後藤先生、万国博覧会にいらっしゃったようですね。

（後藤） ええ、一度だけ。ちょうど中学の3年

生でした。学校内のバスツアー、今でいう研修旅行でしょうか、それで万博にいったことをよく覚えております。何を見たかという、人しか見なかったような気がします。それほど当時人気で、ディズニーランド開園の頃のようにして、入口をはいると、誰もが一目散でお目当てのパビリオンに駆けていくというような時代でしたね。

（野間） 50年前の大阪万博では、日本中が熱狂していましたね。熱気が溢れていましたよね。

（後藤） ええ。ちょうど日本が、高度経済成長期という豊かになっていく時代でしたしね。私も中学生で、英語を学んでいて、実際には、自分が学んだ英語をしゃべる機会などというのはまずなかったわけですが、この万博にいて、外国というものを初めて知ったような次第でした。クラスメートの中には、「英語でしゃべった」というような者もありました。私はしゃべれなかったので、沈黙しておりましたけれど。

(野間) 万博ってというのは何か新しいものを生み出すというか、そういった人々の熱気の中で次の時代に接点を持っていく。そういった性質を持ちますよね。

(後藤) そうですねえ。混んでいて、私たち誰も見なかったと思うんですが、月の石。これは大変な人気パビリオンでして、科学技術というものが、私たち、中学生くらいの子どもにとって憧れの技術だったわけですが、それを実際に目の当たりにすることができる、というようなことがございましたね。

もう一つはやはり、相当の数の国が展示を行ってありましたね。関西の田舎で育ったものですから、外国というものを、ほとんど、といえますか、全く知らなかった子供の頃でして、当時、外国の世界っていうものが見れるっていうことにある種の憧れを持っていた時代だったかもしれませんね。

(野間) 先ほど月の石が出てきましたけど、前年の1969年にアポロ11号が月面着陸したという出来事がありました。ところで万国博覧会は多くのレガシーを残しておりますよね。今もありますが、太陽の塔というのが一番印象に残るものですけども。

先生それ以外に何か万博、あるいは当時の社会の雰囲気の中で、思い出に残っているものがありますか？

(後藤) とくにかく人が多かったということですね。日帰り、しかも学校の旅行で行った。いったいどこを見たかという、まったく覚えていない。50年前ですものね。

(野間) 僕は当時、高校生でした。やはり遠足で万国博覧会見学という企画があったんですけど、行かなくてもいいという選択肢もあったんです。

大阪万博について個人的な思い出を話しますと、人ばかり集まってるというイメージがあって、あまりのお祭り騒ぎに嫌気がさして、

結局行かなかったんです。当時日本の大きな企業がこぞってパビリオンを出していた中で、シャープが出展しなかったんですね。それで奈良の天理に工場や研究所をつくりまして、そこで液晶の表示装置を開発し、電卓や複写機、ワープロなどを発展させていく。シャープのみならず、万博の内でも外でもいろんなことが起こり始めたというのが一つの特徴かなと思うんですね。

(後藤) 今少し思い出しましたが、私どもの学校でESSと当時いってありましたね、英会話のサークルがありました。急にそこにかきこむ同級生が増えたとか。そんなことくらいでしょうか。

(野間) 確か万博前に歩く歩道が大阪の梅田にできましたね。考えたら歩く歩道って変な言葉ですよ。歩くのは自分たちなのに。確かに歩道は動いてくれますけど、その上を歩いてしまうのが関西人の特徴でしたね。じっとしているわけにはいかず、どんどん歩いて行く。関西人の「いらち」ぶり、つまりせっかちさが出た。電気自動車なんかも、万博会場の移動手段として使われていたと記憶しています。今ようやく実用化の段階に入ってきました。万博では未来社会を先取りするいろんなことを提示していました。



(後藤) 万博というのは、やはり20年30年先の世相を見る人たちが、今それを反映させてつくったものかもしれませんねえ。まあ海外に行くってというのは、ほんとに私には想像もできない時代でした。今年はコロナで行動の自由が制限されておりますが、今や、海外にいったことがないという人のほうが少ないくらいになりました。これはもう70年の大阪万博の頃には想像

もできないことだろうと思いますねえ。

(野間) 万博会場ではいろんな事件が起きましたし、会場の外でも社会的雰囲気なんかも含めまして、変化が起きていました。日本の社会が転換点を迎えていたのかなと思いますね。次の万国博覧会が5年後の2025年にやってきますが、またそこで社会が劇的に変わっていくのかもしれないですね。先生どう思われます？

(後藤) そうですね。今、私共の世代というのは、もう一線をひかなければならない時代になっています。子供の頃に見ました万博の世界というのは、今では本当



に普通の時代になっている。今の子どもたちが5年後の大阪万博で、見た社会、見たものが、ほんの数年後には、またそれが社会に普通に受け入れられるようになっていないのでしょうか。想像もできないような道具類を皆が利用するというふうになっていくのだろうと、想像しています。

(野間) この万国博覧会をはじめ各種博覧会につきまして、今後のシンポジウムでは歴史的な振り返りを行うとともに、負の面、当研究所らしくアジアを視野に入れた負の面も視野に収めてゆくことになるかと思います。後ほど企画者の三沢先生のほうからいろいろお話があるかと思っています。それに先立ちまして、我々はあの頃の会場内外を包んでいた熱気も含めまして、雑談交じりにいろいろ思い出話をさせていただきました。

■アジア文化研究所 対談 三沢伸生×北田建二



左から、三沢伸生研究員、北田建二学芸員

(北田) 今回の企画展。日本万国博覧会までの軌跡ということで。明治時代から大阪万博、そして、今度新しく開かれる博覧会をとらえながら、こう歴史的流れをとらえたわけですけど。今回の展示構成を考えたきっかけをまずは三沢先生にうかがいたいと思います。

(三沢) 大学で異文化、特に中東イスラーム世界を専門としています。学生たちに対して異文化認識、異文化表象ってこういうことだによって

話しております。もちろん専門としては中東イスラームですけども、我々自身がどういうふうにしてそうした認識を形成してきたのだろうか。自分の今表現していることと、明治・大正・昭和戦前期の表象に何か違いがあったということに興味をもちまして、今回研究所のほうでこの万国博覧会を基軸としまして、アジアに特化した異文化認識・異文化表象の問題点に関して扱ってみたいと考えた次第です。

(北田) 今回の展示構成を見てみると、明治期の黎明期から、20世紀の殖民地化政策を進めていく過程があり、そして現代に展開していく形になっています。明治時代の西側諸国をみると、例えばパリ万博では各国が自国をアピールする場となっています。一方、日本の内国勸業博覧会は元々のドメスティックな部分があるといいますが、国内産業を見せながら、同時に国内における各地域の異文化を展示している。そういった部分が表象としてあったのかな、と。つ

まり、珍しいものを見せることが博覧会で人を集めることに非常に重要となってきた。このような異文化表象をどう感じ、異文化を認識していたのか、博覧会を企画した側がどのような意図を持っていたのか。その時代的景観について、三沢先生はどのように考えていますか。

(三沢) 非常に重要なポイントですね。博覧会だと真面目にきちんと自分の認識を改めるんだって、つつい襟を正してしまう。でも今回、明治以降から見ると、観光要素がある。

やっぱり博覧会というのは、真面目な姿勢もあるけど、見世物を見よう、変わったものを見ようというものがある。

考えてみれば、お伊勢めぐりにつきましても途中途中で観光名所をみる、おいしいものを食べる要素がある。まさに今この令和の時代にあっても、グルメや観光がとても大きなインパクトを持っておりますので、そういった意味では、博覧会を通して、いわばこうしたまじめな姿勢といわゆる娯楽の姿勢がミックスされている。博覧会ということによって、日本中から人々が正にGOTOで集まってきて、それによって情報が均質化されて、当時の新聞、雑誌のメディアで再生産される。これによって、どんどん日本中にそうした博覧会を契機とした均質化された異文化認識が植え付けられていったような気がします。

そういった意味で北田さんが指摘されておりますように、単に自主的な事件ではなくて、我々自身の異文化認識の問題、異文化表象の問題として捉えていく。しかもそれは、明治で終わっていない。今の令和の時代までそのDNAが綿々と続いているということは、先ほど北田さんが言われた通りではないのかと思っております。



(北田) 受け手と企画者側と見る側と、それぞれの受け取り方、狙いがあって、それに対して必ずしも一致はしないかもしれない。実は、展覧会もそうなんですけど、博物館の側としては、こういうことを考えてほしい、こういうことを知ってほしいっていう部分もあります。見る側は、やはり、珍しいもの・綺麗なもの・貴重なもの、あるいは懐かしいものが見たい。一方、企画者側もそれらを狙っている部分がある。それは実は博覧会から受け継がれている部分も非常にあるのかな、と思います。そこから異文化表象というものが、ある意味、「人類館事件」のような形でちょっと危うい方向へ、問題をちょっとはらむような部分へいってしまう可能性がある。それは博物館も博覧会も同じなんじゃないか。そうしたときに現代における博覧会等を考えると、改めて異文化表象危うい部分と同時に、危うい部分だけでなく、博覧会を通して知り得た情報もたくさんある。そういった、いい面と悪い面、特に異文化表象、異文化理解という面で見たとときに、先生はどう考えますか。

(三沢) おっしゃる通りだと思っております。先ほど野間所長、後藤先生からお話がありましたけども、私も実は大阪万博へは小学生として見学して、スタンプ帳を持って喜々としてスタンプ集めに動いておりました。日本中が高度経済成長して熱狂化していきましたけども、北田さんもいわれました通り、博覧会で我々自身がどういうふうに関わっているのかという問題。それは我々自身の問題でもあると同時に、今の時代にはそれが世界にリアルタイムに発信されますよね。

おそらく今回の2025年の博覧会で、我々がどういうふうに関わっているのかに関して視点が集まると思います。明治以来、綿々と続いている我々自身の異文化認識、異文化表象の問題ということを考えて、それは勿論同時に、見世物・観光娯楽の要素もありますけども、次の万博で我々自身がどういう形で企画を実行していくのかを見据えていく必要があらうかと

思っております。

(北田) そうですね。展示品で先生が提供していただいた、子供時代にスタンプ集めをされたという万博の手帳。あれを見ると、行ったところへ線を引いていたりして、一人の観客がどういったところに関心があったのか見えてくる。僕の場合、よくニュースとかで見る国、例えばアメリカですか、そこのパビリオンへ行こうと思うのですが、三沢先生はそこで中東のパビリオンへ行かれています。そういったところに、もしかして三沢先生の原点があるのではないかと。そこまでは言い過ぎですけど、異文化へのまなざしというものが、大阪万博をご覧になって芽生えたというのはあるのでしょうか。

(三沢) そうですね。子供のころを振り返って、やはり外国というものを強く意識したのは、万博はものすごくインパクトがありました。多摩に住んでいるので、アメリカンスクールが側にありましたから、外国というものが日常的な風景ではありました。それでも、万博へ行くと、知ってはいたけど世界にはこんなにも国がある、こんなにもリアルに広がっていることを実感しました。

今の時代、非常にネットが広がっていて、今の子どもたちにとってみれば、リアルかリアルじゃないかは境界がみえないのかもしれないです。そういった意味で、次の2025年の博覧会は、世界のあるいは、我々自身にどういった影響を及ぼしていくのはとても興味深い。

(北田) そうですね。リアルかリアルでないか。今、確かにデジタル、電子化された情報をたくさん得ることができる。例えば、ものに関する情報も高精細なデータを手に入れることが出来るし、VRを通して見ることもできる。そうすると、それも一つのリアルになってくる。受け手にとってはそれも現実であり、ものが実際に受け手と同じ空間にあるかどうかは重要でなくなっていく可能性がある。

一方で、その空間でしか体験できないものも

ある。僕は、博覧会や博物館に関わる人たちも含めて、見直してみないといけないと考えたのは、祝祭的・イベント的であるが故にその場でしか体験できない要素が強くあるのかなと思います。例えばここにある絵を見ても、その万国旗がバーッと飾られている。この錦絵で描かれている華やかな空間は、実際に絵師が空間で経験をしたんだろうか、博覧会ならではの体験があったのではないかなと考ええる。三沢先生は、例えば錦絵を見ながらそういう気が付いたところはあるのでしょうか。



(三沢) それはご指摘にありますように、資料自体は図書館等々で一点一点拝見していたわけですけど、実際、北田さんに見事にアレンジされてこう並んでみると、こういうふうに繋がっているからこういうふうに変わっていくのかが分かりました。ものが持っている力、ものに対する理解、これはこういうふうに見せようっていう形でもって理解できました。

例えばこの錦絵につきましても、最初は天皇陛下中心になったものが、だんだんと外国にクローズアップ、英語のロゴを入れてみようという形に変わっていきます。まさに錦絵自体の変化の中にもなんかこう、万国博覧会に対する日本人の意識の変化が見てとれます。現物を単体ではなくて、ある意識のもとに並べられている。



「第三回博覧会開場之図」 東州勝月画 1890年

こうふうに文化が成長、変化、進展していくんだってことが見てとれる。文化表象、文化を伝播させていく装置としての博物館並びに博覧会の力というのは大きいんだなって改めて実感いたしました。

(北田) そうですね。確かに、一同に会するという形は、モニターといった限られたディスプレイ空間の中では体験しにくい部分ですね。逆に、ただ一点一点、資料を集めて、一点一点細かく調査をしていって、そこからキュレーションしていって、一つの展覧会をくみ上げていった中で、「あっ」と気が付くことがたくさんある。

やはりそういう部分というのは、博覧会・博物館が非常に重要な役割があると思います。今回は残念ながらこういうような状況でみなさんに見ていただくことがなかなか難しかったのですけれども。今後また是非機会があれば改めて、ブラッシュアップさせながら展示を考えていきたいと思っています。その際はまた是非三沢先生にも。

(三沢) よろしくをお願いします。

(三沢)・(北田) ありがとうございます。

■東洋大学YouTubeにて動画公開（2020年11月19日から終了時期未定）

①【ご挨拶】 <https://youtu.be/S9N1Wa89ahY>

野間信幸（アジア文化研究所長・文学部教授）「開催に向けたご挨拶」

後藤武秀（アジア文化研究所前所長・法学部教授）「東洋大学附属図書館における諸資料収集について」

②【概 説】 <https://youtu.be/D1hFQvzLmw0>

三沢伸生（アジア文化研究所研究員・社会学部教授）「日本の博覧会における異文化表象」

北田建二（井上円了記念博物館学芸員）「博物館と現代日本の博覧会」

③【対 談】 <https://youtu.be/D5AHI9EfsnU>

野間信幸×後藤武秀

三沢伸生×北田建二



日本万国博覧会 までの軌跡

EXPO'70 開催 50 周年の回顧
The Tracks of the International Expositions in Japan
Reconsiderations on 50th Anniversary of Expo'70
12 月開催のシンポジウムを見据えて

— 主編・野間信幸 —

東洋大学
井上円了記念博物館／アジア文化研究所

